



特集

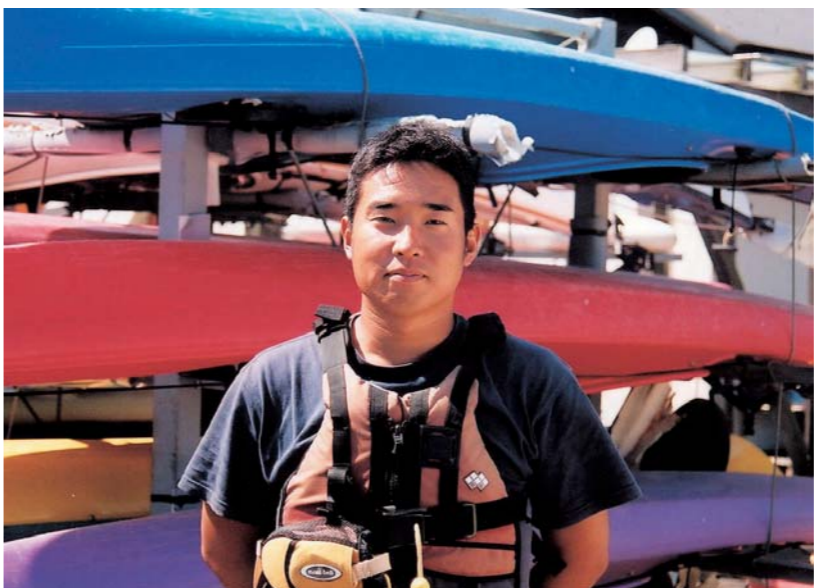
観光地で働く人々

雄大な景観美を誇る西海国立公園九十九島、四百年の歴史を持つ三川内焼、環境都市ハウステンボスなど、佐世保市には、いつまでもわたしたちの財産として残したい観光資源が数多くあります。今回は、一見華やかな観光地の舞台裏で、観光資源を守り、さらにその素晴らしさを多くの人に伝えるため、日々活躍し続けている人たちをご紹介します。



裏山を散策するように 海の散歩を楽しんでほしい

九十九島の楽しみ方はさまざま、魚釣りや遊覧船での島巡りのほか、家族連れでヨットを楽しむ光景もよく目にしますが、最近、波静かな九十九島で、シーカヤック（写真下）を楽しむ人も増えてきています。



シーカヤックインストラクター

はやし だ 林 田 聡 さん

「たくさんの人と出会えるこの仕事が好きです」と笑顔で話すのは、西海パールシーリゾート内で、主に観光客を相手にシーカヤックの指導をしている林田聡さん。
小学校5年生まで船越町で育った林田さんは、「窓の外にはいつも九十九島が見えて、まるで自分の家の



シーカヤックを指導する林田さん。初心者でも30分程度の講習を受ければ、簡単に乗ることができるそうです

庭のようでした」と、子どものころから九十九島をとて身近に感じていたようです。
「シーカヤックはパドル（櫂）を使い、自分の力だけで動かすことのできる、環境にやさしい乗り物です。裏山を散策するように気軽に海を散歩できるのが魅力です。また、多くの島からなる九十九島は変化に富んでいて、四季折々に全く違った表情を見せ、飽きることがありません」と語りました。

美しい九十九島の自然を 未来の子どもたちに残したい

シーカヤックで九十九島の海に出ることの多い林田さんは、自然の美しさばかりでなく、ごみで汚されている九十九島も目にするそうです。その多くは、河川などから流れ着いたものや島を訪れた人が捨てていったものだと思います。

シーカヤックで 九十九島清掃活動

林田さんは、シーカヤックの魅力体験してもらうのと同時に、展望台や遊覧船からは気付かない九十九島のごみの実態を知ってもらうために、ECO SWEEPERS（環境清掃人）という組織をつくり、ことしの7月、10月、11月には、シーカヤックで九十九島の無人島に渡り、島の清掃を行いました。この清掃活動は、来年の3月にも実施予定です。

初心者がシーカヤックの講習を受けた後、準備を整えた一行は、白い砂浜が美しい無人島「鳥の巣島」を目指し、西海パールシーリゾートを出発しました。出発から約一時間後、全員無事に鳥の巣島に到着しました。鳥の巣島のごみは、ペットボトル、缶類、瓶類、ライター、プラスチック類など多種にわたり、予想以上のごみの多さのため息を漏らす参加者もいました。一時間余りの作業で集められたごみは、ごみ袋に全部で19

袋（1袋45リットル入り）。一行は集めたごみをそれぞれのシーカヤックに積み込み、きれいになった鳥の巣島を後にしました。参加者は九十九島の自然を満喫した一方、ごみの問題にも触れ、九十九島の自然保護への思いを新たにしようです。
清掃活動に参加した長崎県立大学大学院生の中鋪優さんは、「ごみを拾う活動も大切かもしれませんが、みんなが捨てないことが最も大切なのではないでしょうか」と話しました。



たくさんのごみ袋を載せて西海パールシーリゾートへ帰りました



講習の自然後、九十九島の鳥の巣島を目指します



集めたごみをそれぞれのシーカヤックに積み込む参加者



ごみを拾い始めてまもなく袋はいっぱいになりました

自然との触れ合いの場を
林田さんは今後もこの清掃活動を続けていくそうですが、併せて、九十九島でシーカヤックを楽しむ上でのルール作りも行っているそうです。「将来は、生涯学習の一環として、子どもから高齢者まで幅広い人を対象に、自然と触れ合える活動の場を作りたいです」と林田さん。

最後に、九十九島の自然についてアメリカ原住民の言葉を引用しながら「この土地は、わたしたちのものではなく、未来の子どもたちから預かっているものです。美しい九十九島の自然を守り、子どもたちに引き継がなければなりません。自然の形を変える二度と元には戻りませんから」と語りました。